

## 中小企業と医療

## 双方をつなぐ「通訳」必要



## 透視図

会場は立ち見が出るほどの熱気だった。今月上旬、京都市の京都国際会館で開かれた日本再生医療学会の総会をのぞいた。再生医療というと大学病院や研究所、大企業が思い浮かぶ。

経済部 西村宏治

だが、総会のシンポジウム「再生医療サポートビジネス」中小企業の役割」では、中小企業の経営者らが医療にどう貢献できるかを語った。

京都市の金属加工会社、二九

精密機械工業は昨年、手術に使うハサミ型の鉗子を医師と共同で開発した。柄が曲がり、患部を挟む部分も回転する。ドイツの学会で画期的だと評された。二九社長は「医療分野はこれからもっと伸びる」と語る。座長を務めた京大再生医科学研究所の田畑泰彦教授(生体材料学)は「中小企業に期待する

のは(経営判断の)スピード感と小回り。話し合いが重ねられるのも大切だ」と強調した。再生医療にとって中小企業にできることは大きいというわけだ。

電機大手など取引先の好不調に左右されやすい中小企業にとっても、医療産業は活路となる貴重な分野だ。経済活性化につなげようと、自治体などが医師や病院と地元企業とを引き合わせる機会も多い。

だが、実際に医療分野に乗り出した中小企業を取材すると、「医師の求めに応じていたら、

赤字になった」「採算が合わない装置の製作を頼まれ、断れなくなった」といった声も聞く。

二九社長にも、歯科の治療器具の生産を手がけて損失を出した経験がある。「医療のものづくりは面白い。でも、中小企業はどこまで自分でやれるのかを考えなきゃダメ」と言う。

医療分野は専門用語も多く、規制も複雑だ。産業の活性化を目指して、より多くの中小企業を巻き込むには、医療側と中小企業側の両者の事情をよく理解して間を取り持つ「通訳」のよ

再生医療の分野では、産学連

◆「透視図」は2週間に1回、次回は4月5日掲載予定です。

携支援事業を手がける京都市リサーチパーク(京都市)が、09年に研究者と企業とを橋渡しする取り組みを開始。仲介役の人材を置き、実験機器など約40件の試作品開発にこぎ着けた。その取り組みを支えたのが工学、医学、薬学に明るく、中小企業との協力の重要性を長年にわたって訴えてきた田畑教授だった。

いい「通訳」となるには幅広い知識と経験、人脈が必要だ。医療に詳しくれば務まるというものでもなく、向き不向きもあるだろう。産業活性化を目指す行政や経済団体には、多くの人材を発掘し、育てていく努力がもっとあっていいと思う。